保育環境における幼児の滞留と「場」の形成

B7H002　　中田 範子

主査：本山 方子、副査：佐久間 路子（指導教員）、宮田 まり子、無藤 隆

第Ⅰ部　本論文の枠組み

保育者が保育環境を構成する時には幼児の動線を考慮し、滞留しやすい空間をどう構成するのかを考え、幼児が滞留する空間的な条件を整えることが幼児の安心感(増田・齋藤，2017)や遊びの取り組み方(河邉，2006)等に変化をもたらし、保育者の援助・視線・意識に影響を与える(松延・中村・藤田・本田・石田・松延・香曽我部，2016 他)ことが示されている。

本論文は、幼稚園教育要領第 1 章総則の「見方・考え方」「環境を通した教育」を説明する「幼児が身近な環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気づき(略)」の箇所を幼児の滞留に着目して分析・考察するものであり、身近な環境に主体的に関わる姿を育てるために「幼児はどのように空間に滞留し、場を形成しているのか」を問うものである。

本論文の問題提起と位置づけについて、次の四点を挙げる。第一に、保育環境は、大人のねらいや意図、価値観をもとに構成された場である。幼児から見れば、保育者の存在も一つの保育環境であることから、保育者の存在を幼児はどのように捉えているのかという視点を持つ。第二に、幼児が知覚した保育環境と保育者が知覚した保育環境には相違がある。第三に、幼児が保育環境のある空間に滞留するのは、そこから場の意味や機能、自分にとっての価値を見出しているからと考える。第四に、幼児にとっての場の意味は発達に伴い移り変わるため、幼児の場と関係性を縦断的に捉えることが求められる。

以上を踏まえ、保育環境における幼児の滞留する姿に着目し、幼児と場の関係性を多角的に捉えることで、幼児の場との関わりを複数の視点から分析し、その様相から幼児にとっての滞留とは何かを明らかにすることを目的とする。また、「幼児は保育環境のどのような空間に滞留するのか。」「幼児の滞留や場の形成にはどのような要素や関係性が関連しているのか。」という二つの問いを立てながら分析・考察を行う。これらの問いを持って、縦断的アプローチ、幼児の声を聴くアプローチ、横断的アプローチで、保育環境における幼児の滞留と場の形成を捉える。そして、得られた結果をそれぞれ交差させながら論証し、幼児が滞留し、場を形成する様相とその関連要素に着目して、幼児にとって滞留とは何かを結論として導く。

本論文は、三部構成となっている。第 1 部では、第 1 章で問題の所在を明らかにして目的を示している。第 2 章で幼児の滞留と場の形成に関する理論や先行研

究を整理して本論文全体の考察の視点を示す。第Ⅱ部は、6 つの研究で構成されている。第 4 章は、【研究 1】として特定の幼児を対象とした縦断的アプローチ、第 5 章は、【研究 2-1,2,3】として幼児の声を聴くアプローチ、第 6 章と第 7 章は、【研究 3-1,2】として保育環境内の閉所をフィールドとした横断的アプローチをとっている(図)。

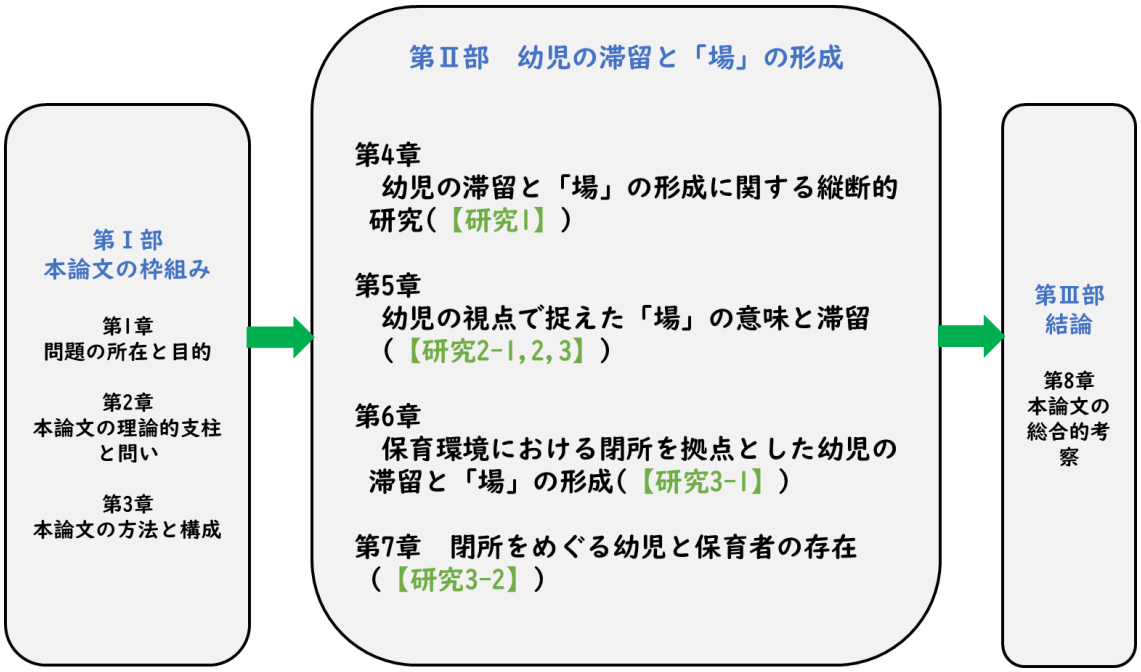

図.　本論文の構成図

第Ⅱ部　幼児の滞留と「場」の形成

1. 幼児の滞留と「場」の形成に関する縦断的研究(【研究 1】)

本研究の目的は、特定の対象児の保育室内における滞留する姿や、場を形成する姿を回遊行動も含めた場をめぐる行動特性から、縦断的な視点で考察することである。

調査方法は、観察場所を保育所とし、在籍する特定の女児 S 子を対象として動画を撮影しながら行う自然観察法である。観察期間は 2011 年 7 月～2014 年 3 月で、対象児の 2～5 歳児クラス在籍期間である。8:30 から開始される室内での自由遊びの時間を週 1 回程度、1 回約 60 分、全 59 回観察した。その後、得られたデータをもとに逐語記録を作成した。

分析方法としては、コーディングとストーリーラインの作成、エピソード分析を行った。作成した逐語記録のうち、対象児の「場に滞留する場面」、「滞留行動から回遊行動に移行する場面」、「回遊行動から滞留する場面」を中心に、サンプリングした全 196 事例を分析の対象とした。次に、対象の全事例を前後の文脈か

ら、滞留行動と回遊行動のきっかけや目的、様相に着目して、一つひとつの事例の文脈から主題を見出しコーディングし、カテゴリー表とストーリーラインを作成した。また、対象児がどのような空間に滞留するのか、滞留や場の形成にはどのような要素や関係性が関連するのかに着目しながら全事例を質的に分析した。以上の方法で作成したストーリーラインとエピソード分析をもとに、幼児の「保育者のそばにいる姿」を「保育者のそばに滞留して場を形成する姿」と解釈し、回遊する姿も含めて空間を巡る行動を分析し、次のように考察した。

第一に、滞留し場を形成する空間の推移についてである。2 歳児 7～9 月に保育者のそばに滞留することが多かった対象児は、やがて保育室内の体をすぼめて入り込む閉所や別所に滞留するようになり、また、遊びたい遊具のある空間で滞留するようになった。次に、保育者が遊びの用途を意味づけた場や見立てやすい特徴のある空間に滞留するようになり、5 歳児になると遊びの拠点なしに他児と関係を構築し保持するようになった。一方で、遊びたい遊具のある空間は、偶然性を伴った他児との出会いの場となり、その後、遊具をもって回遊しながら関係性が構築されて、「場」が形成されるようになった。

第二に、滞留と場の形成の関連要素についてである。場に求める機能を維持しながら滞留する空間が移行する姿から、幼児は、空間に応じた機能を活用するだけではなく、空間に機能を求め、滞留する空間を見出していると考察する。また、幼児にとって、回遊と滞留が相反する意味や機能を持つのではなく、他児と一緒に回遊しながら場を形成し、関係を構築する機能を有するようになると考察する。

2. 幼児の視点で捉えた「場」の意味と滞留【研究 2-1, 2, 3】

本研究の目的は、幼児に園内の「好きな場所」(【研究 2-1】)、「よく遊ぶ場所」(【研究 2-2】)「秘密の場所」(【研究 2-3】)と理由等を問い、幼児が自発的に発した言語データと撮影された画像から、幼児の場への意味づけや価値づけの関連要素を導き、考察することである。

幼稚園、保育園、認定こども園の各 1 園計 3 園で、幼児に一人ずつ、園内の「好きな場所」「よく遊ぶ場所」「秘密の場所」を案内し、理由やそこでの遊びを回答し、該当する写真を撮影してもらった。調査日時は、2020 年 2 月～2021 年 3 月の全 13 回、午前中の約 1 時間であり、研究協力者は 3～5 歳児計 81 名である。次に、得られた画像と言語データから、園内の「好きな場所」と「秘密の場所」の物理的特性とその理由を分類しながら分析した。その結果から次の三点を考察した。

第一に、好きな場所とよく遊ぶ場所の関連性についてである。研究協力者の園内の「好きな場所」「よく遊ぶ場所」の回答をその特性に着目して分類した結果、

「室内の遊び別コーナー」、「室内の一角」、「室内の個人用スペース」、「屋外の遊具」、「好きなもののある場所」、「全体」、「園内の遊び場以外の施設設備」、「特徴的な自然物のある場所」、「閉所」となった。次に、「よく遊ぶ場所」の回答を「好きな場所」の回答と照合して一致率を算出したところ、3歳児18.8%、4歳児12.5%、5歳児16.0%であった。

第二に、幼児が好きな場所と意味づける要素である。「その他」を含めて11の概念が抽出され、『好ましさ』『度合いの高さ』『目的の遊びが可能』のカテゴリーに分類できた。該当する回答が最も多い「存在を認知」に分類した回答からは、そこにある物や人、動物の存在が場への意味づけに結びついている。次に多い「過去の情動体験」に該当する回答からは、この場所で感じた楽しさや自己効力感と、今後も同じ体験ができるだろうという期待感が場への意味づけと結びついている。

第三に、幼児が「秘密の場所」と意味づける場の特性と関連要素である。「秘密の場所」と意味づける場の特性は、「閉所」「用途別コーナー・部屋」「仕切り」「移動空間」「個人使用の空間」「その場にある物」の6つが見いだされた。

また、「秘密の場所」と意味づける要素については23の概念が導き出され、「別空間とのつながり」に該当する回答の年齢別の全切片数に対する割合を比較すると、年齢が高くなるほど割合が高く、「隠れる」に該当する回答は、3歳児に比べて4,5歳児で割合が高かった。

3.保育の環境における閉所を拠点とした幼児の滞留と「場」の形成(【研究3-1】)

本研究の目的は、保育環境の閉所に焦点を当てて観察し、幼児にとっての閉所の機能について分析することである。

調査方法としては、A保育園園庭に設置された閉所であるプレイハウスに滞留するA保育園の1～5歳児及び保育者を対象とした自然観察法である。午前中の自由遊びの時間にビデオカメラで動画を撮影し、得られた録画データをもとに逐語記録を作成した。観察期間は2008年3月～2009年11月の29日間であり、観察時間は約2,760分である。次に、園庭の閉所を拠点とした幼児の遊び場面約840分をすべて逐語化して、全73事例にまとめ、得られた事例を幼児が閉所に近づき入所する場面を中心に「何を目的に閉所に入ったのか」、入所してからの幼児の場面を中心に「閉所内で何をしているのか」というテーマのもとにオープンコーディングし、カテゴリー表を作成してストーリーラインを抽出した。その結果、4のカテゴリーと10のサブカテゴリーに集約され、26の概念から10のストーリーラインが生成されて、次のように考察した。

幼児は、閉所に身を置き滞留して他児と楽しさを共有し、関係性や視点の転換の面白さや目新しさを見出していた。また、幼児にとっての閉所の機能は、閉所

の中という空間があり、そして閉所の外という空間があって生成され、閉所の中と外を行き来することや中にいながら外と繋がる機能がある。また、偶然性も経験することから、保育環境における閉所は、共有と転換、中と外の空間の活用とつながり、そして偶然性を含めて機能が生成され、このような機能が幼児を引き寄せ、遊びたくなる空間として存在すると考察する。

4.閉所をめぐる幼児と保育者の存在（【研究 3-2】）

本研究の目的は、閉所に滞留する幼児と保育者の関わりに着目し、保育者の幼児への関わり、幼児は保育者の存在の捉え、保育者が閉所に直接関与しない場面での場の形成について考察することである。

【研究 3-1】と同様の調査方法で得たデータを「保育者の位置」、「子どもと保育者の関わり」というテーマのもとに、オープンコーディングしてカテゴリー表を作成し、ストーリーラインを抽出した。また、幼児が保育者に関与を求める事例、保育者が関与しない事例をまとめて考察した。

その結果、閉所内に滞留する幼児と保育者との関わりに着目したところ、1～4歳児への保育者の関わりは言葉のやりとりが最も多く、1 歳児へは幼児を取り巻く状態を受容する関わり、2 歳児へは対等な関わり、3,4 歳児へは幼児を取り巻く状況を判断・確認を意図する関わりが多く見られ、5 歳児が滞留する場面には、保育者が直接関与していなかった。

また、1～4 歳のどの年齢においても、閉所に滞留する幼児から、保育者に関与を求める姿が見られた。保育環境における閉所は他とは隔離された空間であるが、時に、幼児は閉所の外部にいる保育者の姿を探して存在を認識しており、保育者の関与を求め、自分の滞留する空間やそこでの状況を保育者に伝えてアピールしながら、外にいる保育者との関わりを保つことが示された。

それには、【研究 3-1】で明らかになった、偶然性を孕む共有と転換という閉所にある場の機能や特性から創出される魅力、他の空間では得られない外部の人との距離感や見え方、閉所に滞留するという特別感を感じること、そして、離れた場にいる外部の保育者に伝えたくなるような保育者との関係性が構築されていることが関連すると考察する。

また、閉所に滞留し、遊びの拠点としている幼児にとっては、保育者は常に拠点に存在しているわけではなく、幼児が保育者の存在を確認する姿が見出せた。保育者が直接関わる場面の有無や保育者がその場に滞留して共に場を形成しているか否かだけではなく、幼児の言動から幼児に内在する保育者をも捉えることの重要性を示すものとして、今後も着目する必要があると考える。保育者が直接関与することはなくとも、保育者の存在を感じ、確認できる、幼児と保育者の関係

性が、保育者の関与なく自律的な遊びを展開する姿や、幼児の離れた場にいる保育者に伝えたくなる気持ちに繋がると考察する。

第Ⅲ部　結論

幼児にとって滞留とは、偶然性を孕みながらも、ある空間に身の置きどころを見出し、その物理的特性を知覚しながら活用して場を形成し、場から自分にとっての価値を見出して、その空間が幼児にとって「生きられる空間」となるプロセスの第一歩であり、また、この第一歩こそが保育環境と幼児の関係性の中で見いだされた、幼児教育の見方・考え方に示す「幼児が身近な環境に主体的に関わる」姿ではないかと考える。

この結論について三点説明を加える。第一に、身の置きどころを見出すことの安心感についてである。【研究 2-1】では、好きな場所として、「安心できる」といった回答はなかったが、【研究 2-3】では、「秘密の場所」と意味づける要素として、「気持ちの安定を求める」という要素が見出された。また、回答から、幼児は保育環境のある空間に身を置くことで気持ちが安定することを経験し、安心感を求めてある空間に入り込む行動を体得していることが考察できるが、その行為は「秘密」といった要素を孕んでいることが示された。

第二に、そこで行うことの目的に対する認識についてである。【研究 2-1】から、「好きな場所」を意味づける要素の一つとして、目的の遊びが可能であることが示された。また、保育者が用途を意味づけた遊びのコーナーは、【研究 1】と【研究 2-1,2】から、幼児が滞留しやすく遊びに取り組みやすい場所であることが明らかになった。幼児は、滞留してそこで可能な遊びを知覚しながら取り組む経験を積み重ねることで、そこで行うことの目的を認識しながら自分の身の置きどころを見出すことを体得すると考える。

第三に、他者との関係性に対する認識についてである。【研究 3-1,2】からは、幼児は、他とは異なる特性を有する閉所に滞留して他者と関わっていた。このように、幼児は空間の特性に応じた他者との関わり方を経験し、身につけていくと考察する。

本論文は研究の対象やフィールドが限定的であったため、異なる対象や方法で研究した場合にどのような結果が得られるのかを確かめることが今後は必要である。また、幼児が狭い空間に滞留する姿は、環境を通した教育を幼児の身体性という観点から解釈する手掛かりになる可能性がある。この点は、本研究では十分に深められなかった限界であり、今後の課題である。